

涙壺

涙壺(標本番号H224132、高さ/30cm 幅/11cm 奥行/11cm)
イラン

山中 由里子(やまなか ゆりこ)

本館民族文化研究部

水底を思わせる暗青色のガラスの壺。細く長い首はねじれ、しおれかけた花の茎のようにたわむ。そしてその先に開く口の部分は涙珠にかたどられている。

この所蔵品とほぼ同形色の壺をわたしが初めて見たのは一五年以上も前、テヘランのガラス博物館である。その美しい色や不思議なかたちに見とれていると、イラン人男性がつかつかと寄ってきて、「戦場に行つた夫や恋人を待つ女が、その涙をためるための壺なんだとさ」と語ってくれた。

頬から落ちた涙の糸はこの容器に受け止められ、くねり曲がった頸部をつたつて、螺旋を描いて底へと流れ、たまつた涙の量が愛の証となるというのか。なんと叙情的な人びとであろう。また「女の武器」をかたちにして残すとは、なんとしたたかなのだらうと感心した。

最近になって再びガラス博物館を訪れる機会があつた。「涙壺」はまだあつた。学芸員らしき女性に「本当に涙をためたんですか」と聞いてみると、「涙容れ(アシユク・ダイン)」というけれども、実際にはバラ水容れ(「ゴラフ・ダーン)なんですよ」とそれまで頭のなかに描いてきた悲哀に満ちた心象をあつさりとくずされてしまった。

バラの花びらを蒸留し、バラ油を摂取したあとに残つた水を、イランでは服や体、部屋のなかにふりかけたり、料理に香りを加えるために使う。バラ水容れとして首の細いガラス、陶器または金属製の容器が好まれたのは、その繊細な美しさのためだけでなく、液体が一度にどつと流れ出ない構造

になっているという実用的な理由もあつたのだろう。首のねじれたガラスのバラ水容れは一七〜一八世紀ごろからシーラーズなどで作られ、一九世紀にはヨーロッパで流し、多く輸出されたそつである。

それにしても、「涙壺」の言説はいつからこの特定の色彩の容器について語られるようになったのだろう。その問いの答えはまだ見つかっていない。

